

## 開催報告 【ダイジェスト版】

# 「薬剤師が考える健康食品・サプリメント」

2007年12月2日(日)、一昨年に続き、京都市内で開かれた第2回ドラッグストア薬剤師研究会は、薬科大学生、大学教授、勤務薬剤師らおよそ100名が集まり、「薬剤師が考える健康食品」をテーマに、今後、薬剤師に求められる新たな専門スキルについて検討した。

### 第1部

## ユタカファーマシーアメリカ医療研修報告

- 1) アメリカ薬剤師の職能について ドラッグユタカ真正店 堀内 友美恵
- 2) 今後、ドラッグストアが目指していくもの～アメリカ・ファルマカを見学して～  
ドラッグユタカ四条大宮店 浦野 貴之

### 第2部

## パネルディスカッション

### “薬剤師が考える健康食品”

座長：西田幹夫教授(名城大学薬学部)

パネラー：白幡 晶教授(城西大学薬学部)

徳山尚吾教授(神戸学院大学薬学部)

矢内原千鶴子理事長(大阪薬科大学)

渡邊泰雄教授(日本薬科大学)

宗像 守代表取締役(株式会社日本リテイル研究所)



### 第3部

## 特別講演会

- 「社会環境の変化とドラッグストアの近未来」 ～日本の医療を変えるドラッグストア薬剤師～  
(株)日本リテイル研究所 代表取締役 宗像 守氏

### ドラッグストア薬剤師研究会の経緯について

株式会社ユタカファーマシー 代表取締役社長 高木 裕

医療改革に伴い、薬事法の改正、薬学部の6年制など、薬剤師を取り囲む環境は、大きく変化、変革しております。何よりもまず現場で働いている薬剤師、特にドラッグストア薬剤師が、セルフメディケーションの担い手として、今後の地域医療にかかわろうと意識改革し、より多くの方々に貢献できる様、色々な分野に職能を拡大していく必要があります。その一助となるように、昨年、この同じ場所で、パネラーの先生方のご尽力により、弊社の米国研修報告も交え、今後のドラッグストア薬剤師の未来像について、広く各方面の方々のご意見を聞かせていただき、また論議していただきました。おかげさまで、いい研究会だったとのご意見もいただきました。今回、特に健康食品をキーワードとして第2回目の研究会を開催し、今後の薬剤師のあり方について、熱い議論が交わされます様期待しております。

## ユタカファーマシーアメリカ医療研修報告

日本よりも早く薬剤師のより専門的、臨床的なカリキュラムを取り入れた薬学教育を行っているアメリカ、そのアメリカでの薬学教育について、またドラッグストア・病院・コミュニティーファーマシーを見学し、薬剤師の職能を学ぶ(カリフォルニア州、ロサンゼルス)

### 1 アメリカ薬剤師の職能について

ドラッグユタカ真正店 堀内 友美恵

アメリカでは、国民から尊敬される職業の上位にランキングされていると聞き、なぜ日本とアメリカの薬剤師の立場がこんなに違うのか疑問だった。アメリカ医療研修に参加していくつか違いが見出せたが、2点についてお話す。①薬剤師とドクターとのつながりについて: 薬剤師はドクターから特定の指示がない限り、ジェネリックに変更して処方ができるだけでなく、患者さんの状態を見て、医師の投与量で副作用が発現した場合、ドクターからの指示さえあれば投与量の調節をすることができる。また、アメリカの薬剤師は自分の専門に自信を持っており、さらにドクターの称号を持つPharm.Dが増え、薬剤師の裁量が大きくなり医師と対等に話ができる人が多い。その結果、医師は薬について、安心して薬剤師に任せることができる。②アメリカの薬剤師と患者さんとのつながり: 慢性疾患治療の場合、アメリカでは、診察は1年に1度だけだが、薬局には薬を受け取るために1ヶ月ごとに訪れる。アメリカの薬剤師は、ヘルスクリーニングと呼ばれる血圧・血糖値・コレステロール・骨密度などの測定ができるので、月に1回の来局の際には血圧や血糖値を測って患者さんの症状を見て、もし何かあればドクターに相談して処方を変更することができる。アメリカでは、薬物治療においてドクターより、顔回顔をあわす薬剤師に相談する方が安心できるというわけである。医師と対等に、話ができ判断できる医学的知識と臨床経験があること、薬局におけるマネジメントがしっかりできることなど、これから日本の薬剤師が学ぶべき点が多いと思われる。

### 2 今後、ドラッグストアが目指していくもの~アメリカ・ファルマカを見学して~

ドラッグユタカ四條大宮店 浦野 貴之

健康維持・増進を目指すいわゆるドラッグストアの今後のあり方について、現在、アメリカで急成長している「ファーマカ」というドラッグストアから学んだことから考察したことをお話す。「ファーマカ:ファーマカ インテグレイティブ ファーマシー」は、現在、アメリカロサンゼルス市その他にあり、積極的にプライマリケアに関わっている薬局として、市民からの支持を受けているドラッグストアである。特徴としては、ウェルネスを売る薬局として複合サービスで予防医療を提供し、従来の薬の販売だけでなくそれぞれの分野のスペシャリストが顧客の求める健康的な生活のために質の高いサービスを提供している。日本のドラッグストアでは、ファーマカが提供している「健康的な生活のために質の高いサービス」ができていだろうか? 毎日の接客業務を振り返ると、生活習慣病について相談を受けることが増え、国民の意識は、健康的な生活にシフトしている。日本の医療現場では、真剣に医療費削減に向けて動き出さねばならない時期にあることから、身近な、代替医療つまり、「健康食品、サプリメント」を利用した一歩進んだヘルスケア情報を提供する、これがこれからの日本のドラッグストアに求められる健康的な生活のための質の高いサービスではないかと思われる。

## パネルディスカッション「薬剤師が考える健康食品」

セルフメディケーションの意識が市民に広がりつつある昨今、健康に関する情報も巷に多くなってきた。そこに登場したのが健康食品であるが、あらゆる面であいまいな部分が多く、消費者の誤解も多い。健康食品は、そのあいまいさゆえに、医療従事者の中でも専門家は数少ない。だから、医薬品やその他の食品との相互作用、アレルギーなどの問題等安全性を十分考慮し、期待される有効性を発揮できるような利用方法を個々の消費者にアドバイスできること、これがドラッグストア薬剤師に求められている新たな機能性だと考える。健康食品の相談に気軽に応じることのできる体制をドラッグストアに求める意見などが出された。

### 1) 薬剤師は口から入る物質をすべて管理する必要がある！

城西大学薬学部 白幡 晶教授

これまで、薬剤師は“薬物”にこだわりすぎていたが、これからの医療は食品を無視しては成り立たない。口から入るものすべて“物質”として薬剤師が関与する必要がある、「いわゆる健康食品」というあいまいなものも薬剤師が専門家としてアドバイスすべき時代である。

学 生 A

では、薬剤師さんにお尋ねしたい。健康食品の用法や用量についてはどのように考えたらよいか教えてください。

日本薬科大学 渡邊泰雄教授

特定保健用食品には、用法用量が記載されているが、ヒト試験から検討し出された結果である。ただ、試験方法も甘いところもあるのであくまでも目安として位置づけられる。

神戸学院大学薬学部 徳山尚吾教授

サプリメントを飲用している消費者や製造しているメーカーにアンケートをとってみたところ、用法・用量に関してあいまいな点が多かった。医薬品と違い食品というか使いなので消費者の判断にゆだねられているのが現状。

城西大学薬学部 白幡 晶教授

健康食品やサプリメントで何が一番いいですか？と質問されるが、一概に「これです」と決定付

ける教科書的なものは存在しない。体調や性別、年齢などで条件が変わってくるので、薬剤師は、それら個々の条件に対応できる知識を備え、用法用量を判断しすすめる必要がある。

### 2) 薬剤師は、個々に合った正しい情報提供を！未病対策に薬剤師が関与していくには？

大阪薬科大学 矢内原千鶴子理事長

健康食品やサプリメントと一言言ってもビタミンやミネラル、そして生薬まで幅広い。医薬品ならいろいろな情報を入手することが容易だが、健康食品の場合はそうはいかない。どのような情報を入手し、伝えるか、消費者一人一人にあったアドバイスも必要であり、時には検査値異常が見られた場合には、受診勧告も必要になる。そうしたことからコミュニケーションを重視した販売によってもっと積極的に薬剤師が関与していくべき。

日本リテイル研究所 宗像 守代表取締役

代替医療の中でも注目されている健康食品・サプリメントに対し消費者は、未病改善や医療との補完を求めている。病気になる前に改善したいという需要が年々大きくなっている消費者のニーズに対し、一方でエビデンスがしっかりしているものとそうでないものが玉石混交している現状において薬剤師が関わるべき大きな問題であろうと思う。

日本薬科大学 渡邊泰雄教授

「がんが消えた」など根拠のない宣伝をしているある健康食品を詳しく調べてみるとがんではなく、単なるしこりだったというケースがあった。だがその健康食品はまったく機能が無いものではなく、動物実験では別の効果を示すのである。健康食品でもっとも重要なのは、安全性である。期待していないつまり不都合な効果がでていないか、薬剤師は患者と何気ない会話から状況を知り、そこから相互作用や疾患への不都合回避に繋がるようもっと薬剤師から相談にのっていくべきだろうと思う。

神戸学院大学薬学部 徳山尚吾教授

健康食品と比べ、効果についてある程度お墨付きを得ている製品として特定保健用食品がある。特定保健用食品は、一般的にもかなり認知度が浸透してきたが、その分野は限定されている。メーカーは新しい分野の開拓を試みるが現時点では難しい。ドラッグストアのように多くの商品をそろえているところをもっと特定保健用食品を意識した販売を推進していけば可能性が広がるのではないかと考える。

### 3) 健康食品で重要なのは安全性の確保、薬剤師は副作用を見分ける眼を！

城西大学薬学部 白幡 晶教授

健康食品の利用増加に伴い思わぬ不都合な結果が出ている例もある。薬剤師は、リスク管理に機能を発揮すべきで、有効性よりも危険性を察知する能力が必要である。

日本薬科大学 渡邊泰雄教授

実際に、アガリクスは土壌の違いで危険な成分が含有する商品も出ている、また欧米で鎮静薬として使われているセント・ジョーンズ・ワートのように免疫抑制剤との併用で効果が減少する製品もある。海外データだけでなく、国内のデータも十分に揃っている製品を選んで取り扱っていくことも日本人への対応として重要である。

神戸学院大学薬学部 徳山尚吾教授

実際の健康被害で重篤なものは、本来含まれていない医薬品成分が含有しているためにおきるケースがある。二次被害を起こさないためにも、健康被害についての情報収集も重要な役割として準備が必要である。

### 4) 今後、ドラッグストア薬剤師は、どう健康食品にかかわっていく？

日本リテイル研究所 宗像 守代表取締役

現在、薬剤師不足が問題となっているが、来年以降薬事法改正において薬剤師がもっと専門性を発揮できる体制が整っていく。そうしたことから薬剤師は質の高い情報提供、また健康食品を含む幅広い知識を持って対応できることを望む。

日本薬科大学 渡邊泰雄教授

患者の健康食品の服用について否定的な医師が多いといわれる中で、医師は健康食品の知識が乏しいこともあり薬剤師に対して相談するケースがある。だから薬剤師は、医薬品との相互作用データなどの情報収集に努め、つねに準備しておく必要がある。

大阪薬科大学 矢内原千鶴子理事長

薬剤師のひとり相撲になってしまわぬよう、薬局は顧客から自然に相談したくなる様な雰囲気を作してほしい、そして薬剤師は、健康食品だけではなく、さまざまな相談に対応し、正しいアドバイスをしてくれる専門家という認識が定着していくことが望まれる。

城西大学薬学部 白幡 晶教授

ドラッグストアが変われば、日本の医療が大きく変わる。健康食品を含めた相談窓口としてドラッグストアが新しいビジネスも出る構築をしてもらいたいと思う。

## 「社会環境の変化とドラッグストアの近未来」

～日本の医療を変えるドラッグストア薬剤師～

### 1、国をあげて取り組む健康・医療施策

日本国の現状は、いわずと知れた少子高齢化である。2005年、高齢者比率は20%を超え、2025年には30%に近づくと予想されている。高齢化に伴い、医療費は必然的に増加していくが、国家が負担している保険料も底をつき、このままでは保険医療制度が崩壊する。国家の医療に対する抜本的対策として、(1) 重度から軽度まで一律3割負担の見直し、(2) 混合診療・代替医療等の大幅導入、(3) 予防・未病改善、補完医療に重点を置くなどを進めようとしている。そして身近なところの医療施策として、特定健診・健診指導やセルフメディケーション推進などがあげられている。昨今、この医療問題をドラッグストアを使った国策・施策により解決していこうと、薬剤師が活躍できる環境・制度作りをすすめている。それが、平成21年からの改正薬事法施行である。セルフメディケーションの中心となるOTC医薬品がリスクに応じて3分類にわけられ、情報提供の強化、さらにはスイッチOTCの拡大が、ドラッグストアでの治療推進を後押しすることになった。

### 2、変革する今後のドラッグストア

品揃えを豊富に大型化してきたドラッグストアは、1980年以降チェーン化し、さらには上場する企業も現れた。現在では、一般用医薬品のシェアは75%、化粧品・日用雑貨はそれぞれ40%以上、健康食品にいたっては通販やネット販売を除くと80%近くになる。地域の利用率が大きくなった結果であることから、地域のニーズにあったドラッグストアへと成長していかなければならない。さらに抱えている医療問題解決に向け、国から大きな期待を寄せられており、地域保健衛生向上の拠点として、セルフメディケーションから高度医療・在宅医療までの関わりを再構築し、医療機関との連携、予防・未病改善につとめていき、そして他に無い新しい専門性と利便性へのシフトがテーマである。

### 3、ドラッグストア薬剤師への期待

以上のことから、ドラッグストアは地域医療における窓口的な存在であること、そしてその機能を充実していくことが重要である。その鍵となるのはドラッグストア薬剤師の存在である。地域の生活者がドラッグストアと薬剤師に求めているのは、気軽に安心して相談、悩みを解決または解決する手段を教えてくれるか、重篤な疾病に繋がる身近な症状を見極め、医師やその他医療専門家へ訴えを代弁してくれるかである。ここには常日頃から生活者とのコミュニケーションが必要であることは言うまでも無く、また医療機関との連携があり、薬剤師が医療チームの一員であることが重要である。健康食品のディスカッションでも求められたように、医療チームにおいても薬剤師だからこそできる、薬剤師しかできない役割、つまり副作用などのリスクの回避、相互作用の情報収集、患者の安全を守る役割がある。これらの機能をもっともっと拡大していくことがこれからの薬剤師に求められていることだと考えている。

発行：株式会社ユタカファーマシー

住所：〒503-0015 岐阜県大垣市十丁目 1339 番地 1

TEL : 0584-83-7330 FAX:0584-83-7331

E-mail : jinji@d-yutaka.co.jp

<http://www.d-yutaka.co.jp>